

平成30年1月31日

修士論文題目：今日の学童保育クラブに求められるソーシャルワーク機能と課題

社会システム研究科 地域コミュニティ専攻

2015M30002立山慶彦

要旨

本研究の目的は、学童保育クラブの利用児童と保護者の抱える多問題に対して、学童保育へのソーシャルワーク機能の導入によって、どのような支援が可能となるか、またその課題について考察するものである。

第1章では日本における「子どもの貧困」問題について概観し、経済的困難さと同時に、子どもと家庭が抱えうる多様な問題について述べてきた。また、そのような現状にあって、共働き家庭やひとり親家庭は増加の一途をたどっており、さらにそのような家庭の多くが利用する、学童保育においては、子どもと家庭の抱える問題が垣間見えるのではないかという仮説から、学童保育の現状について、国民生活センター「学童保育サービスの環境整備に関する研究会」（2010）による、全国の学童保育担当部署を対象に行なったアンケート調査とヒアリング調査の結果をもとに考察を試みた。そこから学童保育を利用する家庭（あるいはしていた家庭）の抱える課題が推察された。

第2章においては、先の国民生活センター「学童保育サービスの環境整備に関する研究会」調査結果から推察した、課題を抱えた子どもと家庭の様相が、北九州市内の学童保育においてどのように表出しているかという問いのもと、著者が北九州市内の学童保育において参与観察とヒアリング調査を行なった。そして、そこから垣間見えた、支援の必要であると思われる子どもと家庭の3つの事例について考察を加えた。事例1では、ネグレクト近似状態の後、児童相談所に保護されたケースであり、虐待の早期発見と早期他機関との連携の必要性について論じた。事例2と3では、共通した問題として、母親による子どもへのマルトリートメントな関わりと、母親の地域からの孤立ケースであった。両事例に共通した、ひとり親家庭の経済的困難と虐待、子どもの発達との関連性が表出しており、またひとり親家庭と地域からの孤立した状況があった。地域住民や学童保育の保護者同士、あるいは同じひとり親家庭の保護者同士が気軽につながる機会等の必要性について論じた。

第3章では、学童保育にソーシャルワークの機能を担うことで得られる特性を3つに整理した。1つは対象者（子どもや家庭）との距離感や位置関係がフラットに近い状態であるゆえ、支援の必要な際に、援助関係が築きやすくなること、そして2つめには行政福祉

機関や学校との連携による、見守り、早期発見と事後フォローが可能になるということである。3つめには、学童内行事の開催や地域イベント参加によりもたらされる、個々と地域との関係づくりである。地域に開かれた学童保育として保護者同士や地域との関係づくり等、地域間の関わりの活性化による保護者の「孤育て」状態の解消が期待される。また、その折に子育て世帯を始めとする地域の潜在的ニーズ把握の貢献可能性についても述べた。第2節では、支援の必要と思われる、第2章における3つの事例を基に、学童保育への導入が望まれるソーシャルワーク機能について、その支援の具体例を交えて言及した。学童保育の職員は本来のケアワーク業務との連続性をふまえたうえで、「人と環境との相互作用」に支援焦点をもつソーシャルワーク固有の視点、すなわちエコロジカルな視点に立って、多問題を抱える子どもたちと家庭を捉え、支援するということである。問題を抱える子どもたちや、その保護者に対し、普段の何気ない関わり、生活場面面接や、必要な場合には個別相談を行うことによって、ニーズ把握から問題の解決や改善、あるいは予防が期待できることについて述べた。相談場面において、子どもや保護者の思いを丁寧に傾聴し、受容しつつ、必要な際には、問題解決への足がかりになるような情報提供、または専門機関との連携の有効性についても論じた。また職員がグループワークとして、子ども集団を含め、保護者集団を様々な形態でコーディネートすることで、地域での孤立や不安の緩和、保護者のレスパイトにも貢献へつながることについて、またその具体的な方法についても提案した。さらに学童保育内では対応困難な問題における、他専門機関との連携について言及し、また、スクールソーシャルワーカーとの連携、役割分担についても提言した。

第4章では、そのような役割を求められる学童保育職員が、支援を必要とする子どもと家庭への専門性、特にソーシャルワーク技術の獲得に関して、既存の研修制度では十分に担保し難い状況にあることについて、「放課後児童支援員研修制度」の研修内容を用いて指摘した。さらに職員の劣悪な雇用形態、条件等の問題により、質、量ともに人材確保の困難な現状についても、全国学童保育連絡協議会の調査等を用いて明らかにした。同じく第4章の第2節では、学童保育を取り巻くそのような現状のなかでも、支援の必要とする子どもと家庭の現状を目の当たりにして、学童保育におけるソーシャルワーク機能を担っていると云える、開拓的な北九州市内の学童保育実践の事例についても考察した。